



法務省“社会を明るくする運動”中央推進委員会主催
第73回“社会を明るくする運動”作文コンテスト

家族を再生する「読み聞かせ」の力

山梨県・山梨市立八幡小学校・六年

たかなし うたな
高梨 詩楠

「本を読んであげるから、こっちに来て。」

母さんが私を呼ぶ。

「また？私だって色々と忙しいんだよ？」

と私が言うと、母さんは決まってこう答える。

「読み聞かせの練習だから、お願いします。」

小学校4年生頃までであったこんな会話。でも最近、母さんは前みたいに私をさそってこない。

母さんは私に、たくさんの本を読んでくれた。『機関車トーマス』シリーズや『バーバパパ』、『ぐりとぐら』や『がまくんとかえるくん』、一冊を何度もくり返し読んでもらったものもあった。つかれていたのか、時々読んでいる最中に母が寝てしまうことがあった。それからは自分でも読めるようになり、わが家での読み聞かせは月一、二回になった。私は気はずかしさもあって、

「もう読み聞かせ卒業でいいよ、母さんも大変だし。」

と言ったら、

「そうだね、わかった。」

母さんは少しさみしそうだった。

プリズン・ライブラリー。最近出会った不思議な言葉だ。刑務所と図書館。関係のない二つの場所が、どうしてつながったんだろう。特集された記事では、「女性受刑者とわが子をつなぐ絵本の読みあい」という本が紹介されていた。

罪を犯して刑務所にいる母親たち。家族と離れて暮らす彼女たちが取り組んでいるのは絵本の読み聞かせだ。“塙の外”に暮らすわが子に向けて受刑者が絵本を読む練習をし、録音したCDを届ける「絆プログラム」は、山口県の刑務所で行われている。

本の冒頭を読み、私はすぐに本を閉じた。「悪いことをしてつかまって刑務所に入っているのに、なぜ読み聞かせをしたいと思えるんだろう。」「一度でも刑務所に入った母親は子どもに会うべきじゃない」と感じたからだ。罪を犯したら、それで終わり。続きなんてない。私はなぜかかたくなにそう思っていた。

しばらくして、母さんにその本の話をした。「読んだよ。でもあなたには難しいかもね。」と言った。

「でもその人の『声』を聞いたら、考え方が変わるかもしれないよ。」と言って、録画した番組を見せてくれた。それは実際に受刑者の読みあいを取材した番組だった。そこに出てきたのは、私の近くにもたくさんいるような普通の女性、刑務所の中だからか、みんな同じ服を着ている。参加者はそれぞれ本を選び、練習している。そこには、『わたしが赤ちゃんだったとき』や『やさしいライオン』や、私も読んでもらったなつかしい本、何よりも気になったのは、練習している母さんたちの『声』。緊張しているみたい。でもやさしい。一人一人の母さんの声は温かくやさしかった。

私は初めて気づいた。そこにいるのは、私と同じ人間、私の母と同じように「誰かの母」なんだ。彼女たちの罪状は、薬物が多かった。でもその理由が、一人親家庭や貧困家庭にある小さなストレスだ。「自分の母親がこんな状況ようになったら」「自分の家族が刑務所にいたら」。そこにいて、絵本を読んでいる母さんたちの「声」を聞いて、罪をつぐない、社会に戻ることの大切さを思い知らされた。

プログラムの参加者は、最後に読み聞かせを録音する。みんな緊張している。読んでいる母さん一人一人に、「がんばれ、がんばれ」と応えんしている私がいた。「早く家に戻って、さみしい思いをしている子供たちをだきしめてほしい」。私は本も図書館も大好き。本や読書が自分にパワーをくれるのも知っている。でも今回、絆プログラムの映像を見て気づいたのは、本が作りだす、まさに「絆」だ。近くにいても離れていても、本が

あればつながれる。読み聞かせてすごいと思う。

もう一つ、気づいたことがある。それは、読み聞かせは、「読んでもらう人」だけではなく、「読んだ人」もいやしてくれる。私の母さんは、単に私に読んであげている人じゃない。きっと私が聞いているから、読みたいんだ。

「母さんちょっと来て」

私は一冊の本を手にとって、母さんと呼んだ。

「これ読んで。」

選んだのは、『ふくろうくん』。楽しいけれど、ちょっぴり切ないお話もあって、何度も何度も読んでもらった。大切な本。

「母さん、ありがとう。」

私は目の前にいる母、そして絆プログラムをへて社会復帰した母さんたち、みんなに伝えたい。